



監督＝ピーター・ウィアー／出演＝ラッセル・クロウ／ポール・ベタニー／マックス・パークス（ブエナ ビスタ インターナショナル〈ジャパン〉配給／2003年アメリカ映画／139分）

ヨーロッパにナポレオンの嵐が吹き荒れる1805年という時代におけるイギリスのフリゲート艦サプライズ号の闘いと人間ドラマを描いたロマンあふれる大作。ジャック艦長を演ずるアカデミー俳優のラッセル・クロウはさすがだし、男ばかりの俳優陣も手厚く立派。そして、荒海と格闘するサプライズ号もカッコいい。しかし、ちょっとストーリーを詰め込みすぎでは……？

🎬 今から100年前は？

今年2004年は、1904年の日露戦争100周年にあたるため、産経新聞での「日露開戦から100年」の連載をはじめ、多くの書物が日露戦争に焦点を当てた特集をしており、興味深い。

日露戦争で勝利し、「一等国」の仲間入りをした日本は、その後、「大正デモクラシー」という平和な一時を迎えながらそれが長続きせず、軍部の抬頭を招き、1931年の満州事変から太平洋戦争へと至った。日露戦争100周年の今、この歴史をあらためて勉強し、その教訓に学ばなければならない。そしてまた、1945年の敗戦から、今は戦後58年の年。戦後復興→高度経済成長→強いニッポン→土地バブル崩壊→経済不況という流れの中に、今の日本がある。その今の日本をどう考えるのかについても、日露戦争100周年という視点が大切だ！

今から150年前は？

今から150年前の1854年はペリーの黒船来襲の年。黒船来襲は、それまで約300年間にわたる徳川幕府の時代、安穩に閉ざされていた世界で暮らしていた日本民族に、はじめて「国際化」の必要性を知らしめた大事件だ。今、ブームになっている「新選組」なども、この時代認識を背景としたもの。黒船来襲から明治維新そして明治政府成立に至る歴史ドラマは、いつ見ても、またどんな視点から考えても面白いモノ。あらためてこんな視点で歴史を考えてみよう。

そして、今から200年前は？

今から200年前、日本には特別な動きはない。しかしヨーロッパでは？

1789年に始まったフランス革命の中、頭角を現したナポレオン・ボナパルトは、1804年フランス皇帝となり、イギリスを含む全ヨーロッパ征服の「野望」に向かってスタートした。ベートーベンも、この時期に交響曲第3番『英雄』を作曲し、この曲をナポレオンに捧げようとしていた。ところが、ナポレオンが皇帝に即位したと知った時、ベートーベンはこのナポレオンの行動に激怒し、ナポレオンの名を書いてあった表紙を破り捨てて『英雄』というタイトルにしたというお話は有名だ。またネルソン提督率いるイギリス艦隊が、トラファルガーの海戦で、フランス・スペイン連合艦隊を撃破したのが1805年10月。ここで敗れたナポレオンは、イギリス本土侵攻を諦めて、ヨーロッパ大陸の制覇へと向かい、1805年12月のアウステルリッツの戦いでオーストリア・ロシア連合軍を破り、ナポレオンはヨーロッパ全土を支配下に入れた。そのナポレオンがつまづいたのは、ロシア本国への侵攻を企てたため。東へ東へと進み、ロシアの首都モスクワまで「占領」したものの、ロシアからは和睦の使者は来ず、「冬将軍」の来襲の前に、ナポレオンは生命カラガラ本国フランスへ逃げ戻った。このロシア遠征の失敗が、ナポレオン崩壊の道へとつながっていったことは、トルストイの名作『戦争と平和』のお話や、その映画で有名。なお、チャイコフスキー作曲の大序曲『1812年』という作品は、このナポレオンのロシアからの敗走を題材とした一大叙事詩だ。

この映画の時代状況設定

この映画の時代状況の設定は、このように、ヨーロッパにナポレオンの嵐が吹き荒れていた時代の1805年。そして主人公は、イギリス海軍のフリゲート艦（パンフレットによれば、3本マストで大砲20～28門搭載、400ないし800トンの高速帆走軍艦。戦列艦隊の支援、私掠船の追撃、輸送船団の護衛等で活躍。現在の駆逐艦、巡洋艦に相当する）である「サプライズ号」とその艦長のジャック・オーブリー（ラッセル・クロウ）。このサプライズ号とフランスの私掠船（パンフレットによれば、敵国の商船などを襲うことを任務とする、民間の武装船）である「アケロン号」との戦いをメインストーリーとしたうえ、サプライズ号の乗組員の人間ドラマやサプライズ号が寄港するガラパゴス諸島に住む珍しい動物のお話まで、ちょっと贅沢に取り入れて描いたのが、この作品だ。

ロマンあふれる戦争モノ！

私は軍艦モノの戦争映画が大好き！「潜水艦モノ」に名作が多いのは、第1に敵の駆逐艦との戦い、敵艦長との心理戦等、映画の狙いやテーマを絞るため、わかりやすく、ハラハラドキドキのストーリー展開がしやすいため。第2に潜水艦という密閉された狭い空間を舞台とするため、人間関係が絞られてわかりやすく、極限状態における艦長や乗組員たちの人間性を深く掘り下げやすいためだ（SHOW-HEY シネマルームⅡ、100頁参照）。しかし、潜水艦モノに限らなくても、軍艦同士の戦いは、この2つの要素が共通しているから、概ねどの作品も面白い。その上、あの時代の帆船の軍艦はそれを見ているだけでもカッコいい。

海戦の面白さと戦術の妙！

また、小さな帆船が波風と戦いながら進んだり、横っ腹に積み込んだ大砲を敵艦めがけて撃ったりするのは、当時の最新の科学技術を活用したもの。砲兵出身のナポレオンが頭角をあらわしたのは、ナポレオンが砲兵としての優れた数学の技術を修得していたという技術面と、兵力の一点集中の素早さという戦略戦術面の両者を兼ね備えていたためだ。

トラファルガーの海戦でネルソン提督が勝利した原因は、ネルソン提督が示した「敵艦隊を風下に置き、イギリス艦隊が順風によって敵に接近する」という基本戦術によるもの。そしてこれは、「壇の浦の戦い」（1185年）で、源義経が平家に勝利した原因である、潮の流れに着目したのと同じ戦術だ。

なお、日露戦争における日本海海戦（1905年）で、東郷平八郎率いる日本の連合艦隊がロシアのバルチック艦隊に勝利した有名なT字型戦法は、「天才参謀」秋山真之が心血を注いで考え出したもの。しかし、イギリス艦隊がフランス・スペイン連合艦隊を破ったのは、このT字型戦法と正反対の戦法。つまり、イギリス艦隊は、フランス・スペイン連合艦隊の中央の戦艦を撃破、突破して、フランス・スペイン連合艦隊をバラバラにしてしまうという戦術だ。トラファルガーの海戦と日本海海戦におけるこの戦術の違いは、1805年と1905年という100年の時代経過の中で、軍艦の性能が大きく変わったことが大きな原因だ。

2003年のイラク戦争でアメリカが見せたハイテク兵器によるピンポイント爆撃がこの時代にあるはずはない。この時代の戦いでは、風向きや風力、晴れか雨かの天候状態、さらには潮の流れなど与えられた自然条件の下、人間の技術で軍艦を操り、少しでも敵より有利な状況に自分の軍艦を置くことが大切。また大砲を撃つにしても、その口径の大小や砲門数における優劣は仕方ないとしても、それを操作する人間の技術の優劣が大きな問題。そんな人間の技術と能力の勝負だから、あの時代の帆船の軍艦同士の戦いはロマンがあり、面白い！

最初の戦闘

サブライズ号とアケロン号との最初の戦闘は、完全にアケロン号の勝ち。この最大の原因は、サブライズ号はアケロン号の所在がわからなかったのに対し、アケロン号はサブライズ号の所在を的確に把握していたこと。だから最初からその優劣は明らかだ。しかも速力と大砲の数は圧倒的にアケロン号の方が有利。

当直の士官候補生ホロム（リー・イングルビー）は、濃霧の彼方に敵艦の姿を見たように思ったが、それは一瞬だけ。その後、その姿は見えない。それでもホロムは迷った末、「敵艦見ゆ！」と報告したため、ジャック艦長は「戦闘配置」を命じた。しかし、ジャック艦長がいくら望遠鏡で敵艦を捜してもその姿はな

い。どうもホロムの報告は間違いではないかと思った途端、大砲発射の閃きがジャック艦長に見えた。明らかに敵の奇襲攻撃だ。「このままではやられる。自艦は破壊される」、そう考えたジャック艦長は、とっさにサプライズ号を濃霧の中に避難させることによって、この攻撃を避けることができたが、この戦闘は完敗だ。そして、この戦闘で、サプライズ号は大きな損傷を負い、また若き14歳の士官候補生ブレイクニー（マックス・パークス）は、右腕を切断するという大きな傷を受けた。

この作品の根本的な欠陥！

この映画のロマンあふれる面白さにケチをつけるつもりはないが、私は、この映画には根本的な欠陥があると思うことを指摘しなければならない。それは、フランスの私掠船アケロン号側の動きを全く描いていないこと。この映画が描くのは、すべてサプライズ号とジャック艦長やその配下の士官と水兵の人物像ばかりで、アケロン号の艦長以下の人物像は何も描いていない。だから、ジャック艦長の考え方や戦術は見えても、アケロン号側のそれは何もわからない。そのため両者を対比した息詰まる駆け引きや心理戦は全く見えてこないことになる。普通、潜水艦モノや軍艦モノがスリングで面白いのは、対決する両者の心理戦をギリギリの極限状態の中で見るからできるからだ。それを、一方の目からだけ見たのでは、ちょっとエコひいきになってしまうのでは……？

サプライズ号とアケロン号はなぜ戦うのか？

そもそも、「サプライズ号とアケロン号は、なぜ戦うのか？」ということ自体も、この映画でははっきりと見えてこない。大雑把な話としては、「イギリスの捕鯨船を襲う、フランスの私掠船アケロン号を追撃せよ」という命令が、イギリス本国からサプライズ号のジャック・オーブリー艦長に下されたということだ。しかし、それだけではあまりにも漠然としており、この命令を受けた後、サプライズ号はどこをどう動いてアケロン号を追撃するのかサッパリわからない。また、2つの船の追っかけっこ(?)にしても、サプライズ号の「進路」は、南アメリカの大西洋側を南へ進み、最南端のホーン岬から太平洋に進むという大まか

なことはわかるものの、具体的にどんな計算やどんな戦術でその進路を定めているのかがわからない。またアケロン号との相対的な関係も全くわからない。何の情報もない中、あてもなく航海してアケロン号を捜すわけではないはず。しかしこの映画では、イギリスの捕鯨船団がどこをどう動き、今までフランスの私掠船からどのような被害を受けたのか、またサプライズ号の補給はどのようにするのか等々の基本データが全くわからないまま、ストーリーが進行することになる。

「追っかけっこ」も、多少欲求不満！

この映画でのサプライズ号とアケロン号の「決戦」シーンはラストまで引き延ばされている。映画づくりのテクニックからすれば、それは当然のこと。そこでこの映画では、中途半端に終わらざるをえない(?) 途中の追っかけっこ(?) のシーンでは、次のような面白いエピソードを用意している。

第1は、速度の速いアケロン号の追跡を逃れるため、救命筏をおとりにしてアケロン号の進路を変えようと画策する戦術。これが見事に成功して、サプライズ号はアケロン号の船尾に回ることができたが……。

第2は、せっかくアケロン号の船尾から追跡できることになったのに、大嵐に見舞われるエピソード。つまり嵐の中を無理矢理スピードを出そうとしたため、サプライズ号のマストが折れて転覆の危険が現実化した時、マストを守ろうとした水兵を犠牲にして、そのマストごと切り捨てることに苦悩するジャック艦長のお話。

第3は、雨が降らず風も吹かないという最悪の気候条件に置かれた中、ある事故によって親友のマチュリン（ポール・ベタニー）が鉄砲で撃たれた時、マチュリンの治療を選ぶのか、それともアケロン号の追跡を選ぶのかを選択するについて、ジャック艦長が苦悩する物語。

第4は、水兵からの不満を一身に受けて、アケロン号の不意打ち的な出現が自分の責任であると考えたホロムが、自ら海に身を投げるストーリー。

このように、いくつかのエピソードを途中うまくバラまくことによって最終の決戦シーンに至るまでの場をもたせているが、そこに何となく、欲求不満の感が残るのは否定できない。

生物学者の話はつめ込みすぎ？

この映画のもう1つのテーマは、サブライズ号が立ち寄った「ガラパゴス諸島」での数々の希少動物の紹介。パンフレットによれば、ダーウィンが1835年に軍艦「ビーグル号」ではじめてガラパゴス諸島を訪れて、希少動物の生態を調査し、それをもとに、1859年に『種の起源』を書いたとのこと。

この映画は、最後の決戦に至るまでのエピソードとして、このガラパゴス諸島での希少動物のストーリーを描いており、そのウエイトは結構大きい。そのため、ここでもジャック艦長の親友で医師のマチュリンが、生物学者として登場し、その博識ぶりを見せてくれる。また、右腕を失った士官のブレイクニーも、有能な生物学者としての才能を見せる。しかし、ナポレオンの時代を背景とした、イギリスのフリゲート艦とフランスの私掠船との戦いというテーマに、この希少動物のストーリーを入れ込むことはどう考えても無理がある！ 私は、このストーリーを入れたことは、この映画の失敗ではないかと思う。やはり、サブライズ号の動きとアケロン号の動きに焦点をしばり、両者の戦いを鋭く描いて欲しかったと思うのだが……。

ポイントは、厚みのある人間ドラマ

この映画の基本ストーリーは、サブライズ号とアケロン号との対決だが、実はそれ以上の価値をおいているのが、サブライズ号内におけるジャック艦長以下の厚みのある人間ドラマ。すなわち、① ジャック艦長と親友ドクター・マチュリンとの信頼と対決そして心の葛藤をはじめ、② ブレイクニー士官をはじめとする少年士官（海軍士官候補生）たちの友情と心の葛藤、そして、③ ブレイクニー士官とドクター・マチュリンとの生物学者としての心の交流、④ 規律違反を犯した水兵に対する懲罰を通して、士官 VS. 水兵、ジャック艦長 VS. 乗組員の人間関係のあり方、などがイキイキと描かれている。ラストでのサブライズ号とアケロン号との決戦に至るまでのメインストーリーは、この映画では、むしろこの人間ドラマにあるととらえた方が正確なのかもしれない。また余談だが、この映画には女性は1人も出てこない。だからキレイな女優さんを期待してはダメ。あ

くまでロマンあふれる男の物語に徹して観なければ……。

美しいヴァイオリンとチェロだが……

サプライズ号での激務の中にも、しばしの休憩タイムがある。そんな時、ジャック艦長は、親友のドクター・マチュリンと2人でヴァイオリンとチェロの合奏。ジャック艦長はヴァイオリン、ドクター・マチュリンはチェロの担当。楽譜は置いているものの、ジャック艦長のリードで曲が奏でられていくと、ドクターはそれに合わせ、2人の絶妙で美しいハーモニーが……。この2人の合奏シーンが、この映画では3度登場する。しかし……しかし……。

なぜ、ジャック艦長はこんなにうまくヴァイオリンを弾きこなすことができるのか？ そしてドクターも……。いくら才能があっても、これだけ弾きこなすためには、音大卒とか、昔は徹底して音楽をやっていたという事情がなければ到底ムリなはず。私だって学生時代、ギターを弾きながらフォークをやったが、それはあくまで片手間で、とてもこの映画のようにモノになるものではなかった。ジャック艦長は、たたきあげの海軍士官で海の男。そして長く、このサプライズ号の艦長をつとめている軍歴の持ち主。そんな立場のジャック艦長が、これほど見事にヴァイオリンを弾きこなすのは、いくら何でも不自然というもの。さらにドクターに至っては、医者としてのすばらしい才能と知識、そして外科手術の現場でのすばらしい技術をもっているうえに、前述のように、ダーウィンを彷彿させる生物学者としての顔ももっている。そのドクターが、さらにチェロを自由に弾きこなし、ジャック艦長と自由な合奏を楽しんでいるというのは、少し才能の与えすぎだろう……。別に私がギターを弾きこなせないから、ひがんで言うわけではないが、御兩人にここまでマルチな才能を与えなくてもよいのでは……？

ラストのつくり方に疑問あり！

ガラパゴス諸島にいる、木の枝に偽装することによって敵の攻撃から身を守る希少動物（虫）から、ジャック艦長は戦術についてのヒントを得ることができた。何事も着眼点が大切だ。アケロン号との決戦は、サプライズ号を捕鯨船に偽装するという奇抜な戦術を思いついたジャック艦長の知恵によって、サプライズ

号の圧勝に終わった。そこでジャック艦長は、戦利品となったアケロン号の艦長に若手士官を新たに任命した。しかし、あの決戦においてアケロン号に乗り込み、アケロン号の艦長の死亡をアケロン号の医師から確認したはずのジャック艦長は、ドクター・マチュリンと合奏しようとしている時、ドクターからアケロン号には医師はいないと聞かされた。

「そんなバカな……?」、「すると、俺に艦長の死亡を伝えた医師はニセモノ……?」、「これは大ゴトだ!」。

そんなシーンが流れる中、私は「果たして、映画はこれからどう展開していくのか?」、「時間はもう2時間経っているはずだが?」と思いながら観ていると、場面は2人の合奏シーンとなり、しだいに「遠写し」に。そして美しい音楽が流れる中、映画はジ・エンド。

「えっ! これからアケロン号はいったいどうなるのだろうか?」そんな不安を残しつつ映画は終わってしまった。だから、私に言わせれば、このラストのつくり方には異議ありだ!

2004(平成16)年3月8日記

ミニコラム

『ローレライ』に期待!

『眼下の敵』(57年)や『Uボート』(81年)をはじめ、潜水艦モノの傑作は多い。『レッド・オクトーバーを追え!』(90年)や『クリムゾン・タイド』(95年)も同様。昔の日本映画にも、『潜水艦1号』(41年)、『潜水艦ろ号未だ浮上せず』(54年)、『人間魚雷回天』(55年)、『潜水艦イー57降伏せず』(59年)があるが、戦後世代の私には残念ながらそれらを観るチャンスはない。

そんな中、日本経済新聞2004年8月

8日付朝刊は、「潜水艦リアルに再現」 「艦内実写、外観はCG」との見出しで、2005年公開予定の映画『ローレライ』の撮影現場を取りあげた。

その舞台は1945年8月、長崎に原爆が投下された直後の日本。そして、「3発目の原爆」がサイパン島の南、テニアン島で投下待機しているという設定だ。主演は役所広司。日本で46年ぶりの本格的な「潜水艦映画」となる『ローレライ』の完成が待たれる。